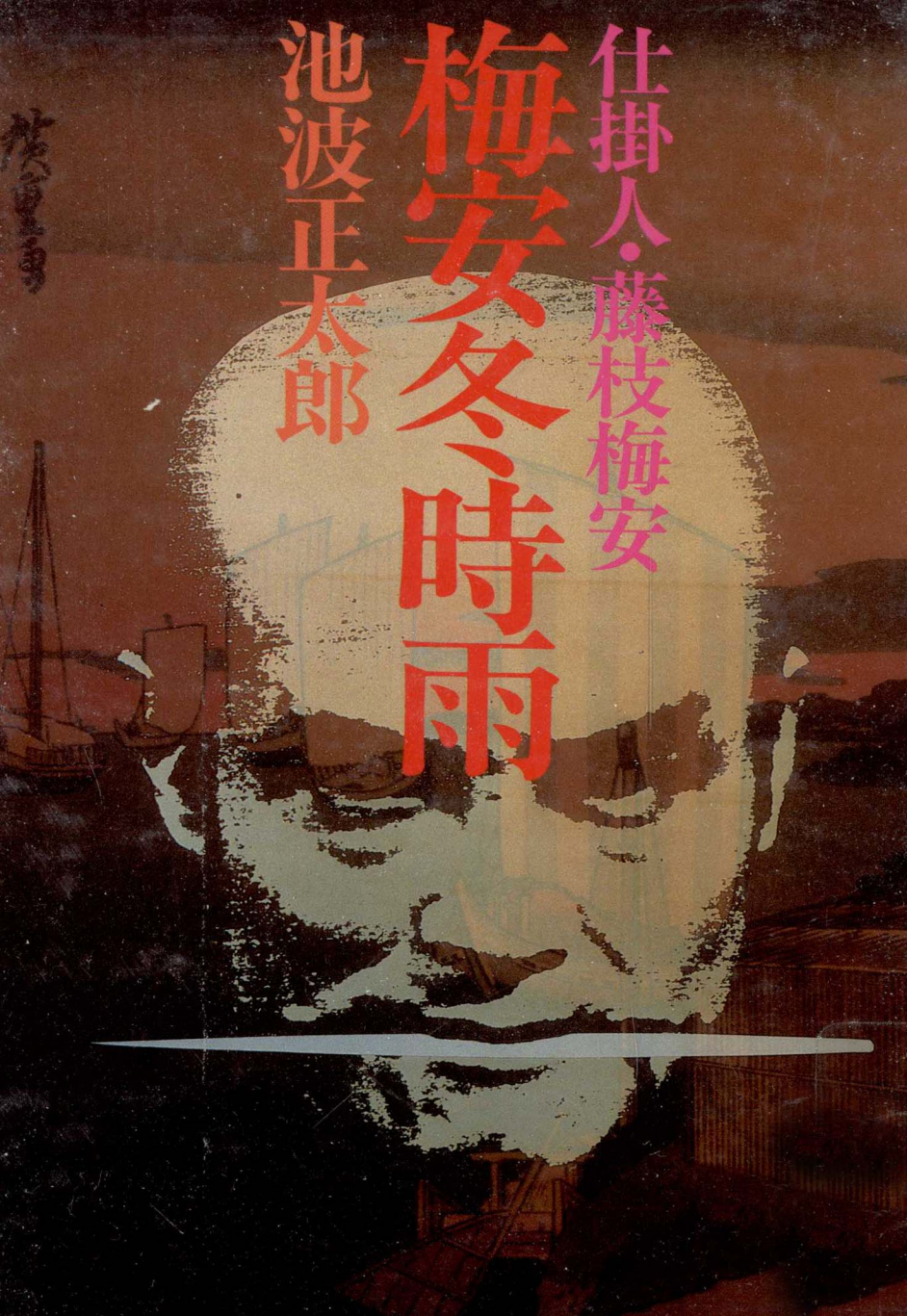
仕掛人・藤枝梅安

梅安冬時雨

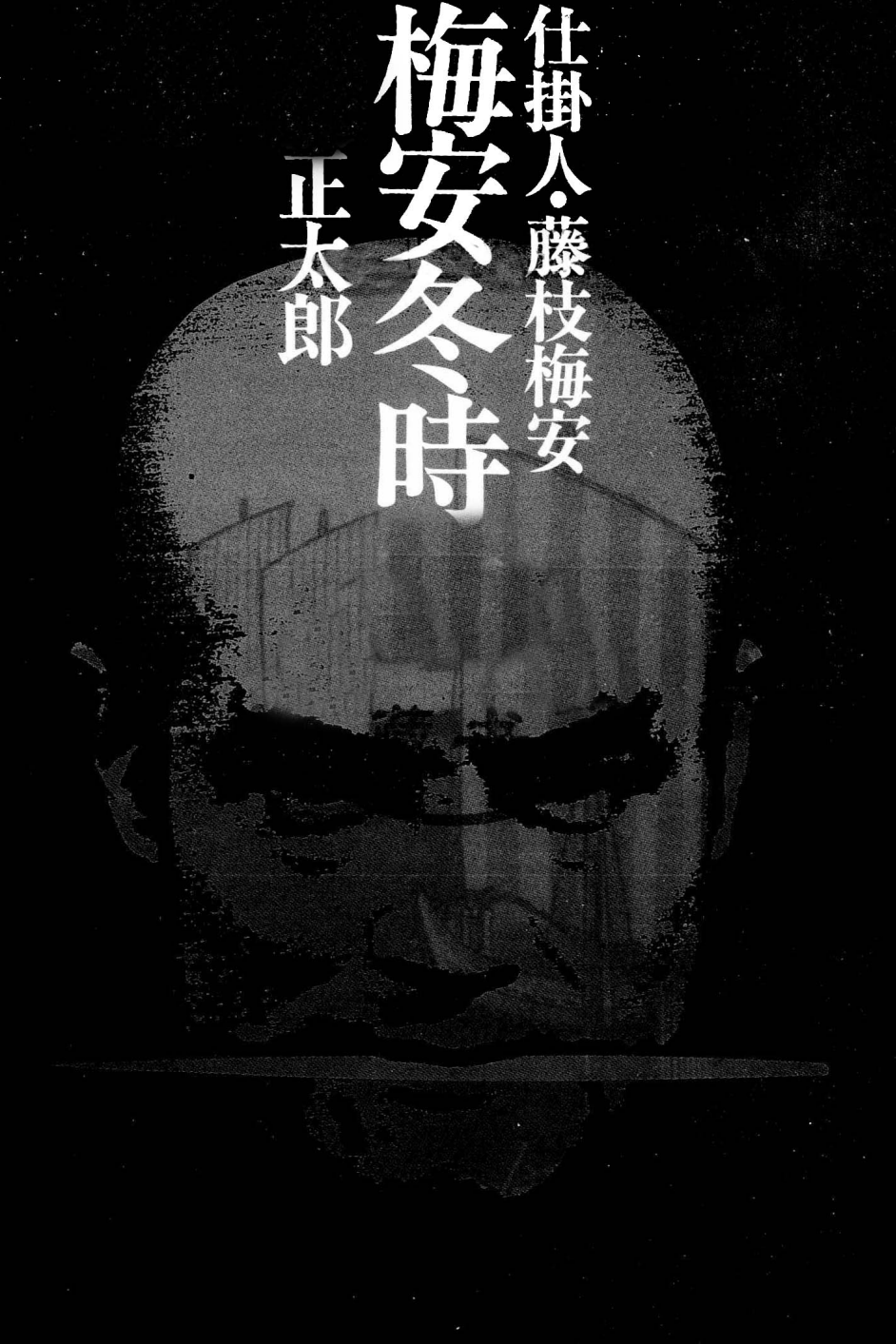
池波正太郎



仕掛人・藤枝梅安

梅安冬時

正太郎



梅安冬時雨（ばいあんふゆしぐれ）

定価　一二〇〇円（本体一一六五円）

第一刷発行　一九九〇年六月二十日
第三刷発行　一九九〇年八月十日

著者　池波正太郎

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　〒一一二
電話（〇三）九四五―一一一一

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　株式会社黒岩大光堂

©池波豊子　一九九〇年
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担でお取替えします。
なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

Printed in Japan ISBN4-06-205015-3（文二）

長編小説

梅安冬時雨・目次

鰯雲 5
師走の闇 46
為斎・浅井新之助 91
左の腕 133
襲撃 176
追悼・解説 213

装幀　辰巳四郎
口絵撮影　但馬一憲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

長編小説

梅安冬時雨（ばいあんふゆしぐれ）

鰯雲（いわしぐも）

（一）

風は絶えていた。

大川（隅田川）の空に、赤い月が浮いている。

この年の夏も終ろうとする或日の夜ふけのことであった。

舟に乗っている客が、舌打ちをして、

「まったく、毎晩のように、これだからたまらない。夜になると風が落ちてしまうのだから……」

忌々（いまいま）しげに、つぶやいた。

「まったくどうも、たまったものじゃあございませんね」

愛想よく調子を合わせた船頭は、彦次郎である。
客と二人きりの小さな舟であった。
客は、小網町三丁目の線香問屋・森田屋作兵衛という中年男で、今夜は、浅草の橋場にある不二楼という料理屋で宴会があったらしく、日本橋の思案橋のたもとの船宿〔遠州屋〕から、小舟を迎えによこさせたのだ。
この船宿は、森田屋作兵衛がなじみの店であった。
その船宿の船頭として、彦次郎が迎えにあらわれたのである。
不二楼の舟着き場へ舟を着けた彦次郎へ、森田屋が、
「おや、いつもの船頭さんじゃあないね」
「へい。旦那が、ごひいきの松吉つぁんが、急に腹痛を起しまして、今日は休んでおりますんで」
こたえた彦次郎の声は、落ちつきはらっていた。
「そうか、それじゃあ仕方もない」
森田屋作兵衛は、いささかも疑念を抱かなかったようだ。
大川の遠くの方で、船頭の舟歌がきこえている。

森田屋が、また舌打ちをして、扇子をつかいはじめたとき、
「あ……」
と、彦次郎が、独り言のように、
「おかしいな」
「何が、どうした？」
「へい。妙な水音がきこえましたので」
「水音？」
「人が落ちたような……」
「いや、わしの耳には、きこえなかったが……」
「さようでございますか」
「お前さんの空耳だよ」
「いえ……あ、人が浮いています」
「捨てておきなさい」
「ですが、みすみす……」
「そんなことには関わり合わぬほうがよい」

「あ、こっちへ流されてきます。あっ、沈みました、沈んでしまいました」
彦次郎は舟を寄せようとした。
「ほうっておおき。後が面倒だよ」
森田屋は、人がちがったように、冷めたい声でいった。その顔をちらりと彦次郎が睨んだが、森田屋は気がつかない。
そのとき、沈んだと見えた人が、ぬっと川面に頭を出した。
「おっ、こっちだ、こっちだ」
舟を寄せる彦次郎を振り返って見た森田屋が、舌打ちを鳴らした。
こうなれば、助けるよりほかに仕方がない、と、森田屋も考えたらしい。
「さ、こっちだ。舟縁へつかまれ」
彦次郎の声を聞いた森田屋が、露骨に嫌な顔をした。
大川の水中から、にゅっとあらわれた二本のふとい腕が、舟縁をつかんだ。舟が少し揺れた。
森田屋が、また舌打ちをした。
すると、舟縁をつかんだ二本の腕が、舟縁をつたわるようにして、森田屋作兵衛へ近づ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いて行くではないか……。

それを凝と見ていながら、彦次郎は何もいわぬ。

森田屋も顔を横に向けていて、気にとめないらしい。

その森田屋の、すぐ傍へ二本の腕が近寄ったとおもったら、水音をたてて、水中から男の上半身が浮きあがった。坊主頭の大男である。

大男は裸体で、口に何か細く光るものを銜えている。

「あっ！」

さすがに気づいた森田屋作兵衛が腰を浮かせた。その腰から股のあたりへ腕を伸ばした大男が物もいわずに、森田屋の躰を抱き、もろともに、仰向けになって大川へ沈み込んだ。

それは、森田屋の悲鳴も、ほとんどきこえぬほどの、間、一髪の出来事だったといってよい。

小舟は、大揺れに揺れた。

彦次郎は、川面に眼を配っている。

遠くに、荷舟が一つ、ゆっくりと通っているだけであった。

大男は、藤枝梅安である。
抱きかかえて、再び水中へもぐった梅安が、口に銜えた仕掛針で森田屋作兵衛の一命をうばったことはいうまでもない。
間もなく、梅安の頭が浮きあがってきた。
「あ、梅安さん」
「彦さん、ありがとうよ。おかげでうまくいった」
「ま、舟へあがりなせえ」
「今夜は暑い。泳いで行くよ。品川台町で待っている」
「いいともね」

（二）

線香問屋の主人・森田屋作兵衛について、藤枝梅安は何も知らぬといってよい。
梅安は、この仕掛けを、六年ほど前に、薬研堀の料理屋・草加屋金蔵からたのまれ、引き受けた。例によって、草加屋金蔵を信頼した上でのことだ。

草加屋は、料理屋としても、江戸で名の通った店であった。
そのとき、草加屋金蔵を、梅安に引き合せたのは、ほかならぬ音羽の半右衛門である。
「ま、この仕掛けを引き受けるのも断わるのも、お前さんの一存だが、草加屋金蔵さんという人は、むかしからのつきあいで人柄はよくわかっている。いうことに嘘はない人ですよ」
と、音羽の半右衛門は梅安にいった。
草加屋金蔵は、半右衛門そっくりの人物で、躰は肥っていたが、口のききようから顔つきまで、半右衛門にそっくりであった。金蔵は、仕掛けについて、くどくどと申したてなかった。
「線香問屋の主を仕掛けるなぞ、妙なことにおもわれるでしょうが、あの男は、この世に生かしておいてはならない男なのです。どうか一つ、お願い申しますよ、梅安さん」
たのまれてから、梅安は、彦次郎のたすけを借り、森田屋作兵衛の裏面を探ってみたが、それについて、ことさら本篇では、くわしくのべるまでもあるまい。
まさに森田屋は、
「一日、生きていれば、それだけ、悪事を積み重ねて行く男……」

だったのである。
「森田屋の仕掛けが終れば、おれには何処にも義理やしがらみが残らなくなる。早く、この仕掛けを片づけてしまい、さっぱりとしたい」
梅安は、この夏に入ってから、しだいに決意をかためはじめたようだ。
あの鵜ノ森の伊三蔵が、女装し、藤枝梅安を襲ってから、まだ半年もたっていない、同じ年の夏も去ろうとしていた。
あの一件で、白子屋菊右衛門一味は、ほとんど、姿を消したり、あの世へ旅立ったりしたが、
(これで、すべて終ったとは、どうしてもおもえぬ)
と、藤枝梅安は、ひそかに考えている。
少くとも、浪人剣客の三浦十蔵だけは、
(私への恨みを忘れてはいまい)
このことであった。
十蔵は、いきなり、梅安宅へ押し込んで来て、梅安へ斬りかかった。あのとき、小杉十五郎が飛び込んで来なかったら、梅安の一命はなかったろう。

三浦十蔵は、十五郎の一刀に顎を切られ、傷を受けたまま、逃走した。あれから、江戸では見かけないが、きっと何処かで生きているだろう。

（そのうち、きっと、江戸へ舞いもどって来るにちがいない）

梅安は、そうおもっているし、小杉十五郎も、そのときの覚悟をしているらしい。十五郎は、このところ江戸をはなれず、品川台町の梅安宅へ泊り込んでいる。それというのも、十五郎は十五郎なりに、梅安の身をまもるつもりなのであった。

「ともかくも、彦さん。おれは、しばらく江戸をはなれる」

その夜おそくなり、品川台町の家へ帰って来た梅安がいった。

小杉十五郎が豆腐を井戸水で冷やしておいてくれ、それと小ぶりの茄子だけが酒の肴であった。

というのも、南日本橋・松屋町の薬種屋〔啓養堂〕の主人、片山清助の躰は、梅安の治療によって、ほとんど回復したが、この夏の暑い盛りを江戸にいたのだから、かなり疲れが出て、また、足のぐあいが悪くなってきた。

そこで、かねてから梅安がおもっていたように、

「涼風が立ったなら……」

片山清助夫婦を、熱海の温泉へ連れて行き、ゆっくりと保養させるのが、梅安の大きな目的である。ゆえに、梅安は今度の仕掛けを急いだのだ。

二つの小舟は、彦次郎が、品川の宿外れにいる漁師から借りて来て、梅安と綿密な打ち合わせをおこない、別々に大川へ漕ぎ出したのであった。

「それにしても、梅安さんの腕力にはおどろいた。舟縁から腕を伸ばしただけで、森田屋の躰が浮きあがってしまったものねえ」

彦次郎は燗をつけた酒を旨そうにのみながら、

「治療のほうも、どうやら一段落したようだし、まあ、ゆっくりと骨やすめをしておいでなせえ。今年は、この春からずっと梅安さんも、大変だったからねえ」

「彦さんも、よく、たすけてくれた。それに小杉さんにも、このいのちをたすけてもらった」

小杉十五郎は、苦笑を洩らしたのみだ。

彦次郎が、

「そうときまったら、留守番は小杉さんと二人ということですね」

「うむ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com